

申命記8章1－10節

エフェソの信徒への手紙4章30－5章2節

ヨハネによる福音書6章37－51節

本日の福音書は、先週の続きです。8月の聖書日課の福音書は、ヨハネ福音書6章24節から66節にある命のパンに関する物語を4回に分けて連続して学びます。

先週は35節まででした。本日は37節からですから、36節が省略されています。そこには「しかし、前にも言ったように、あなたがたは私を見ているのに、信じない」とあります。これは35節の「イエスは言われた。『私が命のパンである。私のもとに来る者は決して飢えることがなく、私を信じる者は決して渇くことがない』」を受けての言葉です。ここにある「あなたがた」は、「群衆」を指しています。また、「前にも言ったように」と語る「前」とは、6章26節の「よくよく言うておく。あなたがたが私を捜しているのは、しるしを見たからではなく、パンを食べて満腹したからだ」のことです。五千人の食事に与った群衆でも、信仰に至っていない人もいと語っているのです。

五千人の食事のお話は、7月21日にマルコ福音書を通して学びました。その時、解釈はいろいろあるが、マルコ福音書に関して言えば、食べ物が増えた奇跡と必ずしも決定できないことを述べました。逆にヨハネ福音書では、6章26節の言葉から考えますと、食べ物が増えた奇跡として認識する人がいることが、前提になっているようです。ただし、ヨハネ福音書もそのような理解を肯定しているわけではありません。そのような認識を超えることを求めています。もし、現代のわたしたちも、五千人の食事をただ食べ物が増えた奇跡として認識しているならば、イエス様の言葉はわたしたちにも向けられていると言えます。ただし、ヨハネ福音書の目的は、批判ではなく信仰への導きですから、いつでもイエス様のしるしに気が付いて、信じるようになればよいのです。そのことを示しているのが本日の箇所です。

「父が私にお与えになる人は皆、私のもとに来る。私のもとに来る人を、私は決して追い出さない」で始まる37節から40節は、葬送式や逝去者記念聖餐式で用いられる福音書箇所でもあります。その点では、ほかの福音書よりも数多く読まれた福音書といえるかもしれません。それは間接的に教会の信仰において、もっとも大切な事柄を示す福音書箇所の一つともいえます。実際、40節「私の父の御心は、子を見て信じる者が皆永遠の命を得ることであり、私がその人を終わりの日に復活させることだからである」は、ヨハネ福音書の最後の方20章31節にある「本書の目的」のところにある「これらのことが書かれたのは、あなたがたが、イエスは神の子メシアであると信じるためであり、また、信じて、イエスの名によって命を得るためである」と同様の事柄を示しています。その事柄を少し拡大して言えば、天地を創造された父なる神様の意志とは、その神様ととともに初めからおられ、物理的にも時間的にも、「今」という地上に到来されたイエス様を通して、主なる神様を信じることであり、本来主なる

神様が備えてくださっていた「命」、現在のわたしたちの理解から言えば、「永遠の命」を得ること、ということです。そのような信仰に至ることです。ただし、五千人の食事の出来事に限らず、イエス様の人間的側面だけを見て理解するとき、その信仰にはなかなか至りません。そのような人々の代表的登場人物が、ヨハネ福音書においてはユダヤ人です。ここでも唐突に登場しますが、ユダヤ人です。ただし、ここでのユダヤ人は、歴史的な意味あるいは現実的な意味でのユダヤ人ではありません。そのように認識してはいけません。物語世界の登場人物、フィクション世界の存在です。

彼らの無理解は、41節「ユダヤ人たちは、イエスが『私は天から降って来たパンである』と言われたので、イエスのことをつぶやいて」から始まります。つぶやくというのは、不平を言うという意味もありますが、疑問や反対意見を持つことでもあります。さらに彼らは、「これはヨセフの息子のイエスではないか。我々はその父も母も知っている。どうして今、『私は天から降って来た』などと言うのか」(42節)と語ります。彼らは、イエス様が「ヨセフの息子」であること、つまりこの地上でごく普通に生まれた人であるのに、なぜ「天から」などというのかと受け止めたのです。彼らの認識は、人間的理解として正論です。すでにマタイやルカのイエス様の誕生物語が知られていたと思いますが、そこにある不思議さを理解しなければ、いつの時代でもこの理解と同じになるといえません。しかし、イエス様は、そのように理解する彼らに対して、信仰へと導く言葉を語り掛けます。それが44節以下です。

そこでは、「終わりの日」という未来の事柄や、『聖書(旧約)』という過去について、また、復活や父(神様)を見るという本質的に大切な事柄に触れつつ、最終的にイエス様ご自身が命のパンであるから、今、そのパンを食べるものは、永遠のいのちに至ることが大切だと結論づけます。この理解が、人間の超えた霊的理解とでも呼ぶべき事柄です。しかし、この説明が、人間的理解にとどまるユダヤ人たちを、さらなる無理解へと導いてしまいます。そのお話は来週です。

さて、ヨハネ福音書は、起承転結の筋を持った物語ですが、イエス様のことに気が付いて、言い換えれば人間的理解から霊的理解へと転換し、信じるようになればそれでよいのです。ここでも同じです。イエス様は、誤解をしている登場人物に対しても、つねに信仰に至るようにと語り掛けます。今イエス様を信じている人たちにとって、そのイエス様を語り掛けは、自分たちの信仰を確認すること、またそれをより深めることを意味します。

本日は8月11日です。わたしたちの国において、この時期は、79年前に集結した戦いのことを覚える時です。またそうであるがゆえに、今も世界中で戦いが起きていることを覚える時でもあります。その時、何が大切か、それはここに示される信仰にほかなりません。なぜならば、すでに過去起こってしまった悲しみは、人間的な方法では慰められないからです。あるいは今起きている戦いは、人間的な方法では、なかなか終わらせることが他できないからです。しかし、天地創造の初めからおられるイエス様を通して主なる神様を信じる信仰を深める時、その悲しみが慰められる、戦いを終わらせるヒントがあります。地上がすべてではないからです。そのことをこれからも伝えていきたいと思ひます。そのために信じていきたいと思ひます。